

北海道哲学会・北大哲学会共催シンポジウム《現代哲学の水脈を求めて》

## ジェームズを生み出した渦 ～ヴァールが論じるジェームズ思想の誕生

山田 健二

### はじめに

『具体的なもの』第一章に再録された「書簡集によるウィリアム・ジェームズ」(1922年)は、学位論文『英米の多元論』(1920年)に続く、ヴァールの二度目のジェームズ論であった。後者が当時の英米の哲学者の思想相互の内的関連を探求しながらジェームズ思想を描出する試みだったのに対し、前者は、当時発刊されたばかりのジェームズ書簡集<sup>1</sup>に依拠し、肉親や友人に語ったジェームズ自身の言葉をつなぎ合わせながら、内面で練り広げられる彼の思想形成のドラマを彼自身に語らせるという試みだった。ヴァールが描き出す「人間ジェームズ」は、我々におなじみの「健全な懐疑家」としてのジェームズではなく、神秘経験や心霊現象、不死について関心を寄せ、それらに哲学的表現を与えようと苦闘する「情熱的な神秘家」としてのジェームズである。ジェームズに二つの側面があったというのではない。むしろ後者こそがジェームズ哲学の中核をなすものであった。あるいはジェームズ思想の中核には常に「神」が、しかも全知全能にして非人格的な神でなく、人間にもっと近い「有限の神」があった。さらにそれは、そのような「神」との合一という神秘的思想を常に伴っていた。だがジェームズは自身の神秘への情熱を、健全な懐疑精神で疑い、経験主義を越えることなく踏みとどまってより慎重な哲学的表現を探し

<sup>1</sup> 『ウィリアム・ジェームズ書簡選集』は、ジェームズ没後10年の1920年、ジェームズの息子ヘンリーによる編纂のもと出版された。

求めて苦闘した。現代哲学の文脈では無視されがちなジェームズのそのような姿を、ヴァールは我々に改めて再確認させてくれる。本稿はそのようなヴァールと同様の試みを、より単純なシナリオにおいて行おうとするものである。すなわち、彼のいくらか錯綜した「神」概念の起源と展開を整理することで、「神秘思想を内に秘めたジェームズ」を明るみに出そうという試みである。

## 1. 最後と最初の神秘思想

1910年68歳で没したジェームズの最晩年の著書『多元論的宇宙論』（1909年）で、ジェームズは現代の読者を困惑させるかもしれないフェヒナーの「地球霊」について一講義さいて紹介している。フェヒナーは感覚関に関する法則で知られる精神物理学者であるが、様々な分野の学術書のほか文芸的書物も多数出版した。その中に、自身の神秘体験に基づく信仰告白の書もあった。ジェームズが紹介するところによると、フェヒナーは自然のすべてのものに生命と意識とを見た。それら小さい意識は同時により大きなものへ合一し、やがて地球全体が一つの意識、「地球霊」をなすというのである。豊富で巧みなアナロジーと圧倒的具体性こそフェヒナーの魅力であるとジェームズは言うが（WJ2:700, 宇宙:118）、その具体性がかえって後世の読者の困惑を大きくさせる。とはいえ具体性をはぎ取ってしまえば、フェヒナーは当時欧米を席卷した哲学的・宗教的一元論<sup>2</sup>の一形態にほかならないとも言える。すなわち無数の人格、無数の意識は結局のところ「より大きなもの」あるいは「一者（絶対者）」の意識にもとに包摂されるという思想である。

一者のもとにある個別意識が一者においても保存されるかのように一元論者は論じるが、ジェームズは青年期から一貫して、このことの論理的矛盾を許さなかった。青年期には端的に嘲笑して拒絶していたジェームズだが<sup>3</sup>、晩年に

<sup>2</sup> 『英米の多元論』でヴァールは当時の多数の一元論を網羅し、分析している。

<sup>3</sup> 一元論者に対するこの時期の嫌悪を、「連中の聖職者ぶった雰囲気！それと不毛性！」と、ジェームズはのちにロイスに書き送っている（1880年, L1:205）。

は彼はこの矛盾にむしろ接近し、それを乗り越えるべく苦闘してきたことを告白することになる。一元論者が「論理的垣根を・・・何の苦もなく自由にこえていくのを見て驚いたり・・・憤ったり羨ましがったりした。・・・心の底では、私もまた同じ自由がほしかった」（WJ2:718, 宇宙:148）。フェヒナーの地球霊のような「より広大な自我」との合一を、しかもフェヒナー的具体性のもとでの合一をジェームズもまた渴望してきたのである。

「より広大な自我との合一」という観念は、父ヘンリーの神秘思想を通じて青年ジェームズになじみのものであったであろう。のちのジェームズ同様、ヘンリーも彼独自の「回心経験」をもち、そのことを通じてスウェーデンボリ主義に改宗した<sup>4</sup>。カルヴィニズムの厳格な神に対し、スウェーデンボリ主義の神は「放蕩息子」<sup>5</sup>を許す神であった。被造物をそのもとに包摂して保護し、同時に被造物をその自主性にまかせる。「依存」と「自由」を両立させるのがヘンリーの「神」だった<sup>6</sup>。だが、神と被造物が同時に同一であり区別もされるというあからさまな矛盾は、健全な懐疑主義を貫く決意を固めていた青年ジェームズには受け入れがたいものであった。他方でカルヴィン主義の神もまた、父同様受け入れがたいものではあった。「ごくわずかの範囲にしか愛を向けられない神、努力によって成果を得ようというあらゆる情熱を奪い取る予定説」、そういうものは「非合理」である、というのも、「それが我々の最も大切な能力に対し、そのための対象はなにもないのだと語るからである」<sup>7</sup>。「神」がもし存在するならば、それは我々の運命に関心を持ち、我々の呼びかけに応じてく

<sup>4</sup> Feinstein, 1999 (1984), *Becoming William James*, Cornell Univ. Press : 67-73.

<sup>5</sup> 資産家の父から勘当された「放蕩息子」ヘンリーの葛藤は、Feinstein, *ibid.* : ch.4に詳しい。

<sup>6</sup> これはヘンリーの言葉だが、この言葉の続きがまたヘンリーの内面をよく表していて興味深い。「哲学の問題とは次のことに帰着する。すなわち、自由と依存とを両立させること、あるいは有限のものが、いかにして無限のものから、止むことなく生命を吹き込まれ続けるのかを示すことである。しかもいかにして低位のものが慢心することなく、上位のものが破産することもないのかを」（*ibid.* : 238）。

<sup>7</sup> “Reflex action and Theism”, 1881 in WJ1 : 551.

れる人間的な神でなければならない。

だがいずれにせよ、神はもう死んだのだと若きジェームズは友人に語っていた。(父と時の形而上学的宗教家の姿を念頭に置きつつ)「いまこそ年寄りたちの尻や腿を打ってやっつけるべきときではないだろうか・・・神が死んだのなら、あるいは少なくともはや無用のものであるなら、あらゆる「大きなもの」も同様である<sup>8</sup>」。若きジェームズは「神なき」自然主義者となろうとする。だがそれは唯物論的自然主義では決してない。彼が「神」をひとまず遠ざけるのは、父や宗教家たちの言葉がうつろに響き、現に経験されるものとしての具体性を欠くからである。神に代わるものとしてジェームズが掲げるのは、自然という「全体」との調和<sup>9</sup>、あるいは以下の手紙に表明された、同胞という「全体」への参加と貢献という理想であった。そしてこの「全体」への参加は、あくまでも自由意志の行使によるのであり、「全体」への貢献は、私が自主性を発揮することにおいてこそ果たされるのである。

「・・・他のどの思想より私に長く残り続けた思想、疑いの波が世界のすべてを飲み込んで洗い流したとき、岸に打ち上げられた私しがみついていたような岩のような思想、それは、私は自由意志を持っているのだという思想、そして、自分が人類の一員であり、さまざまな種類の喜びや痛みを感じる能力を所有しているのだという思想である。・・・神の意図 (purpose) を見通す望みがすべて断たれているのだとしても・・・我々はそう望みさえすれば、大義 (final cause) の代わりに我々の傍らにいる同胞たちを選び、それを享受することができる。そしてこの享受されたものは、個人個人が何を成し遂げるのかに概して依存しているのだという事実を知ることを通じて、それほどもう悩む必要がない程度に我々は自分の人生を快活にし、良心を清浄にすることができる。個

<sup>8</sup> ホームズ宛1868年。Perry, 1996 (1948), *The Thought and Character of William James*, Vanderbilt Univ. Press: 97.

<sup>9</sup> 「『自然に一致した生』、つまり自分の個別意志が自然の意志に調和し、自然が自分に割り当てたものであれば何であれ喜んで黙認するような生」をジェームズは友人にすすめた。(ウォード宛1866年, L1: 78-9)

人はさまざまなしかたで人類全体 (race) の財産増加に寄与できる。・・・人は同胞と真の交流をもつことができる」(ウォード宛1868年, L1: 130)。

したがってヴァールの指摘する通り、「神は存在しないかもしれないが、人間の総体としての〈偉大な存在〉は存在する」(ヴァール: 57)。若きジェームズは宗教と神を、いわば世俗の範囲にとどめようとしたのである。

## 2. 回心

同じ時期ジェームズは、しばらく続く精神の危機の時代に入っていた。望んでいた画家の道を断念させられたこと、ハーバードでの生理学の研究に展望を見いだせなかったこと、持ち前の冒険心からブラジル探検に参加したが現実の厳しさに挫折した<sup>10</sup>こと、理想と現実のあれこれの齟齬が、ジェームズに身体的、精神的不調をもたらしたようだ。ジェームズが父や形而上学者の神秘思想に反発していたのは、表向きは研修の名目でドイツで療養生活を送っていたころだった。療養の目立った成果がないままジェームズはハーバードに復学し、その後しばらくして、決定的な危機が訪れた<sup>11</sup>。

「ある夕方の頃、私はある品物をとるために、薄暗がりの衣装部屋へは行っていった。そのとき突然、なんの予告もなしに、まるでその暗闇から現れたように、私の存在に対する身の毛もよだつような恐怖心が私を襲った。それと同時に、かつて保養所で見たとある癲癩病患者の姿が、私の心に浮かんできた。それは緑がかかった皮膚の色をした、髪の高い青年で、まったくの白痴だった。・・・彼は、ペルー人のミイラのようにそこに座っていて、黒い瞳だけしか動かさず、まったく人間とは見えなかった。その姿と私の恐怖が、一種独特なふうに結びつけた。もしかすると、あの姿こそが私なのだ」(WJ2: 149-151, 諸相1: 242-3)。ジェームズは聖書の次のような「全面的依存」の思想にすぎりつ

<sup>10</sup> 荒れる海や大量の虫、ジェームズの目にはあまりに無気力に見える現地人に、ジェームズは大いに幻滅した。ヴァール: 48-51を参照のこと。

<sup>11</sup> 書簡集編集者である息子ヘンリーによれば、その時期は1869年から70年にかけての冬のある日のことであった (L1: 147)。

いて何とか正気を保った。「我はよみがえりなり、かくれどころなり」(ibid)。

だがジェームズを本当に救ったのは、「依存」よりやはり「自由」の思想だった。おそらく自分が信じたいと思った信念がそこに書かれていたからなのだろう、最悪の危機の時にめくったルヌヴィエの著書の自由論がジェームズの宇宙を文字通り一変させた。「私の最初の自由意志の行使は、自由意志を信じるというものにしよう。思弁や詮索はやめよう。……かつては狡猾な外的世界が私の行為を慎重に決定するその隙について、自殺をすることこそもっとも勇ましい挑戦だと思っていたが、いまや私の意志でもう一步すすみ、自由意志で行為するだけでなく、自由意志を同様に信じることにしよう。私という個人が本当に存在すること、そして創造する力を持つことを信じよう。……生とは行うこと、苦闘すること、そして創造することである」(L1:147-8)。

私は定められた運命に翻弄されるだけでない。私の行為、私の意志が、新しい宇宙の創造に寄与する。単にそのように信じて耐えるというだけのことではない。この信念に基づいて行為することが、現に、つまり私に感じられるものとして、私に対する宇宙のあらわれを一変させる。信じて行為することが、現に宇宙を一変させる。のちにジェームズはこの思想を次のように敷衍する。

「認識者 (knower) は行為者である。一方で彼は真理の協力者であり、他方で彼は、彼がその創造に寄与した真理を記録するものである」。理想は行為を通じて宇宙を変化させ、「その限りで、自分が表明した真を創造する。言い換えれば、心には、その誕生からこのかた、自発性がそなわっているのであり、投票権が与えられているのである。心は競技に参加しているのであって、単なる傍観者ではない」<sup>12</sup>。理想を掲げて行為する英雄的人間は、いわば宇宙の創造者であり、さらに自己の理想が実現されるさまを目撃する目撃者でもある。真は「いま、ここ」にあるものでなく、未来において実現されていくべきものである。『信じる意志』(1896年)や『プラグマティズム』(1907年)につらなっていくこの思想が、ジェームズ哲学全体を支える基盤となる。

<sup>12</sup> “Remarks on Spencer’s Definition of Mind as Correspondance”, 1879 in WJ1: 908.

### 3. ロイス

回心経験から数年後の1873年(31歳)、ジェームズはハーバードに解剖学の教職を得たが、彼の関心はすでにそこにはなく、まず心理学、そして哲学へとシフトしていった。絶対主義者ロイスをハーバードに招き入れたのは、仕事に脂がのってきた1882年(40歳)のときだった。哲学的立場の相違にもかかわらず深まるロイスとの交流の中で、ジェームズはヘーゲル主義へのこれまでの偏見を改め、それが単なる学者ぶった詭弁<sup>13</sup>でないということを知った。さらに、「絶対者」の概念を導くロイスの知識論によって、ジェームズは自身の経験主義が独我論の嫌疑にさらされるのを見た。そしてさらにもう一点、ロイスの「絶対者との合一」論に(それを範型として)、「同胞との連携」が肉体の垣根を越えて、意識のうちに神秘的に成し遂げられるとする議論の構築の可能性を見たのかもしれない。ロイスとの交流の時代、ジェームズは心靈現象や宗教的神秘経験、さらにはまた精神病理学的な心的状態に関心を深めていく。

ロイスは、知識がおよそ可能であるなら、それを下支えする絶対者が必要だと論じたのだった。観念または「感じ (feeling)」は指示作用をもつ。すなわち感じられるものとして自身の実在とは別の、ある対象を志向する。この対象が個人の意識の中の、別な観念にすぎないのなら、真も偽もない。むしろその人が「真と思う」ということがあるにすぎない。真偽がおよそ可能であるならば、つまり知識がおよそ可能であるなら、観念は個人意識の外部に「超越」しなければならない。「より大きな自我」がそれを持っているのでなければならない。「あなたはある対象を意味し、それについて主張をなし、それについて語り、それについて疑いおかしみ、またあなた個人としてはそれについて知らないと認める、そのようなことができるのは、あなたのより大きな自我、よ

<sup>13</sup> 例えば「私が個人的に知る限り、ヘーゲル主義者のすべてが術学者というわけではないにせよ、すべての術学者はヘーゲル主義者に最後にはならざるを得ないように、どうも私には思われる」(“Absolutism and Empiricism”, 1884 in WJ1: 1019)。

り深い人格、あなたの通常意識の総体が、すでにその対象を所持している限りにおいてである<sup>14</sup>。こうして、観念のこの「自己超越」の連鎖によって、自我はより大きな自我に包摂され、絶対者の自我に至る、というのである。

ロイスはさらに、絶対者の中においてもなお、個人の自我は独自性を保つと論じる。絶対者は認識者であり、それぞれの個別意識は、絶対者の認識対象として、まさしくその個別性ゆえに認識的価値ある存在として保存されというのである (Wahl: 40)。ジェームズはこの「論理」にまだ納得はいかないものの<sup>15</sup>、ロイスの次の言葉には魅了されたであろう。「神は我々であり、我々は神である<sup>16</sup>。我々は「神」の外側にいて「神」を手助けする存在にとどまらず、むしろ「神」と一体であるというのである。ロイスがジェームズをいかに魅了したか、いかに重要な哲学的ライバルだったかは、次の手紙がよく示している。それはのちの58歳のジェームズが『宗教的経験の諸相』を構想しているときに書き送られたものである。「私が執筆するときは片方の目をペンに、片方の目をあなたに向けています。・・・私はあなたによりかかって生きてきました。というも、私の野心的空想を最高に飛翔させるのは、私があなたの征服者となるということだからです」(1900年, L2: 136)。ロイスと戦うにあたって、彼はまず自身の経験主義を洗練させることに取りかかる。

#### 4. 根本的経験論

壊れたものはもう元に戻らない、したがって壊してはいけない。これが一元論者の警告だとすれば<sup>17</sup>、ジェームズは、注意作用によって個別的観念が取り

出されるにしても、そのことによって経験そのもの(意識そのもの)は破壊されるものではないと応じるだろう。いわゆる経験主義(特に連合主義心理学)は、明確な内容を伴う切り取られた個別的観念を重視しすぎてきた<sup>18</sup>。そうではなく、諸観念をつなぐ「連結子」のように働く、観念としては不明確な「関係の感じ」もまた、経験に直接もたらされるのである<sup>19</sup>。『心理学原理』の「思考の流れ」の章で論じられて有名になるジェームズのこの主要哲学は、ロイスの挑戦に応える中で形成されたのかもしれない。すなわち、経験主義は絶対者をもちださなくとも独我論的でないということを示す挑戦の中で。あるいは経験主義を「徹底化」させる試みの中で。

私の観念が私の意識を超えて「客観的对象」を指示していると、いかにして言えるのか、私とあなたが、同じ「客観的对象」を指示していると、いかにして言えるのか。要するに、どのようにして「感じ」は「自己超越」するのか。晩年の諸論文をまとめた『根本的経験論 (radical empiricism) 論集』(1912年、死後出版)は、この課題をさまざまな観点で論じたものである。だが80年代、その基本的構想は、ロイスへの直接的応答としての初期論文「認識の機能」(1884年講演、翌年論文公刊)にあった<sup>20</sup>。

我々は自身の主観世界を超えることはできない。世界とは所詮、明確なまた不明確な、ときに感知されないさまざまな「感じ」が織りなす、私の主観世界にすぎない。そこでロイスは主観世界を包摂する「絶対者」を持ち出したのだったが、これに応じてジェームズは、次のように論じる。確かに我々は自身の主観世界を超えることはできない。だが「外界」は、この主観世界内の「感じ」の進行に、組織的に効果を及ぼす。外界もなく他者もいなければ、私の世界は夢の世界のように混乱し、予期に一致せず、刹那的な消失が繰り返される

<sup>14</sup> Royce, 1892, *The Sprit of Modern Philosophy*, Houghton Mifflin Company: 370.

<sup>15</sup> 「あたかも小説の人物たちが、ページから抜け出して、著者の話の外側で自分たちのものごとを処理するというようなもの」とのちにジェームズは例えた (WJ2: 717, 宇宙: 146)。

<sup>16</sup> Royce, *ibid*: 471

<sup>17</sup> ゲイルの言う「ハンブティ・グンプティの直感」。Gale, 1999, *The Divided Self of William James*, Cambridge Univ. Press: 288.

<sup>18</sup> ジェームズはそのような経験主義を、「観念の原子論」と呼ぶ。(WJ1: 429)

<sup>19</sup> 「本来的に事物間の関係が確かに存在するのと同じように、それ以上に確実にこれらの関係を知る感じ (feeling) が存在している」(WJ1: 161)。

<sup>20</sup> この論文がロイスへの直接的応答であることの指摘は、Kuklick, 2001, *A History of Philosophy in America*, Oxford Univ. Press: 155.

にすぎないだろう。だが「感じ」は単独であらわれず、「文脈」をともなってあらわれ、それらは相互に連関し、行為を導き、行為はその結果として（またはその「効果」として）また別の「感じ」を私にもたらす。私の行為はあなたの世界に「効果」をもたらし、あなたに「感じ」を生じさせ、それがまたあなたの行為を導き、私の世界に「効果」を及ぼす。

私が開いた書物のページに書かれた「ニュートン」の語を、私が理解していることを疑り深い友人にどう納得させるか<sup>21</sup>。まずこの語は肖像画に描かれたニュートン像を鮮明に思い出させる。ニュートンの業績、ニュートンの時代に関するさまざまなイメージがそれに伴う。そこで私は、ニュートンの肖像画や著作を探して彼に提示する。その肖像画に特徴的な鬘に注意が向かえば、17世紀に特有のさまざまな事情を彼に説明する。「このようにして私は、「ニュートン」という語が、両者の心の同じ「場所」を占め、同じ関連性をもっていることを示そうとする」(WJ2:849)。彼がまだ納得いかなければ、同様の証拠の提示や対話を繰り返す。私と友人は、それぞれの主観世界の中で、それぞれの行為がそれぞれにもたらすそれぞれの観念、行為と観念のこのそれぞれの連結がもたらすものが、互いにそれぞれの予期を裏切らないそれぞれの観念をもたらすが故に、外界を「共有」するとそれぞれに信じることができるのである。

「彼の感覚に訴えかけること」こそ、私の「最後の手段」なのである (ibid)。

ある意味では世界はやはり私の主観世界にすぎない。しかしそこには、私に由来するのではなく（つまり恣意的でなく）生じる諸観念がある。あれこれ議論を交わしたり、証拠をそこかしこに求めたり、要するに働きかけをすること、特定の意図と予期をもった働きかけをすることで、その結果生じる諸観念に満足させられるのであれば、私は夢見るものでないと信じることができる。少なくともとりとめなく夢見るものでないと信じることができる。これ以上のこと

<sup>21</sup> “Function of Cognition”, in WJ2: 849. なおこの論文は、『プラグマティズム』を補完し、諸批判に応える諸論文が収められた論文集『真理の意味 (Meaning of Truth)』(1909年)の巻頭論文として採用されている。

をさらに望んで絶対者を持ち出す必要はないと、ジェームズは論じるのである。

この意味で、夢や錯誤や幻覚も、引き続き観念や行為やその効果とうまくそぐわないと判明するまでは、その限りで「実在的」であるといえる。神秘家や情熱的な宗教家の特異な神秘経験も、それが未来の自我によって実経験として否定されない限りは、その「実在性」を独断的に疑うべきでない<sup>22</sup>。こうしてジェームズは、神秘的経験に積極的に関心を向けるようになる。あるいはむしろその関心を積極的に表明するようになる。

## 5. 心霊協会

1884年ジェームズは、設立から2年のイギリス心霊協会に参加し、以来協会に積極的に関わった。その理由の一つは、科学的不寛容への異議申し立てという、「スポーツマン好きのするフェアプレイへの愛好」<sup>23</sup>であっただろうが、最大限の労力を尽くしてもその不正を暴くことができないという限りで、真正なものに限りなく近い心霊現象というものを目の当たりにし、それに魅せられたということもまた事実である<sup>24</sup>。死にゆく肉親と同じ経験を遠く離れた場所で経験するという「予知夢」や、生者の秘めた思考や死者の言葉すら媒介するという「思考転移」といった現象がもし真正のものであるなら、それは自分と他者の意識が「より大きなもの」へと合流するという、彼の神秘思想を具体的に裏付けるものとなるだろう。『心理学原理』でジェームズが述べたように、意識には明確な中心部分だけでなく、それを取り巻く不分明な「辺縁」もある。この「下意識」の自我(“subliminal” self)が、なんどきでも我々の通常の生に

<sup>22</sup> 「他の実在に効果を生み出すものは、それ自身一つの実在と呼ばなければならない。だから、目に見えない、あるいは神秘的な世界を非実在と呼ぶべき哲学的な理由を、私たちはなんらもたないように私は思う」(WJ2:461, 諸相2:383)。

<sup>23</sup> L1: 225. 書簡集に挿入された編者でありジェームズの息子であるヘンリーの解説。

<sup>24</sup> ジェームズが特に見せられたのはパイパー夫人という霊媒師だった。心霊協会の活動、それに対するジェームズの関わり合いの詳細は、プラム(鈴木恵訳)『幽霊を捕まえようとした科学者たち』(文芸春秋, 2007年)を参照。

侵入してくるのかもしれない。……もっとも低位にあるのは、忘れられた自分の記憶保管庫にすぎないのかもしれない。だがもっとも高位にあるのは、我々はそれが何であるのかまるでわからない<sup>25</sup>。脳は思考を「生産」するのではないかもしれない。プリズムが光を分光するように、脳も「超越的世界であらかじめそこにある」多数の思考をより分けるものなのかもしれない。そして異常な精神状態で意識の「閾」が緩むとき、自分のものでない思考が流入するのかもしれない<sup>26</sup>。死者と「あの世で再開できる」かもしれない<sup>27</sup>。死は私の意識を肉体から解放するのかもしれない。解放される時、この世とあの世とで激震がおこるのかもしれない。やがて平衡をとりもどし、何ごともしなかったように、生者は日常を送るが、死者の意識は生者の意識をなおも取り囲んでいるのかもしれない<sup>28</sup>。

だがその総決算であるべき『宗教的経験の諸相』（1902年）で、ジェームズは心靈協會の成果とは距離を取り、宗教的経験をまず科学的に解明する道を探る。辺縁にあって通常気づかれず漂っている意識断片は、彼岸のものならぬ自分自身の意識断片であるとも説明できる。人生を送る中でひたすら辺縁に押し込められてきた「もう一人の自分」を形成する諸経験が、「回心」経験において突如「閾」を飛び越え、これまでの自分と全面的に交代するのかもしれない。つまり、突然現れて我々を驚かせ回心させ絶望の淵から救い出すのは、「神」の声でなく、意識の「閾」の向こう側にいた自分自身の声なのかもしれない（WJ2: 458, 諸相2: 378）。

だがここでジェームズは方向を変え、プラグマティックな宗教論に向かう。宗教的経験の科学的解明がどのようなものになるのであれ、つまり回心を促す「声」がどこから響いてくるのであれ、より重要なことは、その「声」が私を

現に救い、それにともない私の宇宙の相貌が変化するということであり、そこにこそ宗教の意味があるのだと。「宗教的に解釈された世界は、唯物論的な世界を言いかえただけのものではない。それは呼び名の変更以上に、唯物論的な世界がもっているものとは或る点で違った自然的構造をもっているに相違ない。しかたがって、そこでは異なる種類の出来事が期待されうるし、また異なった態度が要求されなければならないのである」（WJ2: 462, -3, 諸相2: 386-7）。

「声」の由来を詮索し、自分がどこまで大きな自我に連続しているのかと問い始めると、無用な「過剰信仰」に陥るとジェームズは警告する。必要にして十分な神概念とは、その大きさがどれほどのものであろうと、「各人を越えたところに、そして幾らか各人と連続したところに、各人とその理想に親切なより大きな力が存在しているという信仰」（WJ2: 468, 諸相2: 396）の対象としての神である。その信仰においては「現在の自己はそのより大きな自己の不完全な表現でしかなくなり、そして宇宙はそういう自己が、さまざまな程度の内容をもったものが寄り集まったものと考えられ（る）」(ibid)。ジェームズがここで特に警戒しているのは一元論である。一者にまで至る最大限の拡大は必要ない。むしろ自身の潜在意識の発見程度の、ささやかな自我拡大でも十分であると。

だがそうすると、結局私は自分自身と「合流」するのみで、友人や肉親などの具体的な他者とは「合流」しないと考えるべきなのだろうか。それとも、もう一歩踏み出すためにまだ何かが欠けていたのだろうか。もちろん心靈協會の成果はまだ不十分であった。だがそれだけでなく、ジェームズには決定的な神秘経験が欠けていたし、何より「全体への合一」論の決定的矛盾が克服されなければならなかった。二三のささやかな例外<sup>29</sup>を除いて、ジェームズに神秘経

<sup>25</sup> “What Psychological Research Has Accomplished”, 1896 in WJ1: 696.

<sup>26</sup> “Human Immortality”, 1898 in WJ1: 1118.

<sup>27</sup> 死に瀕した父ヘンリーに寄せた言葉。1882年, L1: 218.

<sup>28</sup> 死に瀕した妹アリスに寄せた言葉。1892年, L1: 309.

<sup>29</sup> 死を迎える年である1910年の論文, “A Suggestion About Mysticism”で「過去5年以内に生じた」ものとして四件紹介されている。そのうち三件は、明確な内容を伴わずに過去の経験が一挙に回想されるという経験、もう一件は、同時に全く違う夢が進行するという経験である。

験はついに訪れなかったが、代わりにベルグソンが現れ、合一論の矛盾の解決の糸口が見えはじめた。ジェームズは最後の挑戦をはじめた。

## 6. 最後の挑戦

私にあなたの意識が合流するとき、その意識を感じているのは誰か。論理にしたがえば、その答えは私でもあなたでもない第三者、すなわち「より大きな自我」にならざるを得ない。「より大きな自我」は私やあなたとは異なる観点からそれを意識し、そこにはもはやわたしの観点もあなたの観点も消失している。論理にしたがえば、フェヒナーの地球霊やそれに類する集合的意識、下位のものの意識がそのまま全体へと合流するという集合的意識はすべて否定されなければならない。フェヒナーに魅了されていた晩年のジェームズにはそれは「耐え難いもの」、「非合理的なもの」に映る(WJ2:723, 宇宙:155)。それは各人を切り離してそれぞれの意識に閉じ込め、宇宙を「不連続なもの」(ibid)に分断してしまう。「私は何年も間、真剣にかつできるだけ忍耐強く、この問題ととりくんだ。そして何百枚もの紙に、ノートやメモやこの問題に関する私自身との議論をかきちらした。……この格闘は、結局むなしかった。私は袋小路においつめられているのに気がついた」(WJ2:723, 宇宙:157)。すなわち経験主義をあきらめるか、論理をあきらめるか、論理の前では人生は非合理であることを認めるかのかいづれかを選ばなければならないと(ibid)。この自伝的回顧はさらに続く、そこにベルグソンが現れた、と。彼を読まなければ「私はいまお無数の紙をインクで汚しながら……むなしい試みを続けていただろう」(WJ2:726, 宇宙:162)。ベルグソンとの出会いでジェームズがついに選んだのは、論理を放棄するという「反主知主義」の道だった。その詳細をここで論じる余裕はないが、矛盾は概念作用のうちにこそあるのであって、「感じの流れ(生の流れ)」のうちには実はなかったのだとジェームズは論じる。「として感じられる」とき、すなわち「感じ」がそれとして概念化されるとき、「感じ」は概念的な存在として固定化される。そうでないとき、すなわち生の流れのままにあるとき、その中ではどの「感じ」も、どの方向にも変化していく

可能性を秘めた「分節されていない全体」として存在している。概念作用はこの「全体」からその特殊な相を切り取る。私に感じられた「感じ」と「より大きな自我」に感じられた「感じ」は、それぞれ同じ「全体」の別な切り取りの中に、「として感じられる」ものとしてあらわれる。だがこれはもはや「概念」であって「なまの感じ」ではない。二重化をもたらしものは概念作用であって、「感じ」そのものではない。「実在するものはみな互いにいれこになってはまりこみあい、ちらばりあっている……どんな小さなものも、言葉の全き意味で、ヘーゲルのいわゆる「それ自身の他者」である」(WJ2:758, 宇宙:208)。あるいは「経験のもっとも小さな脈動の中にも、超越論者が、絶対者だけがもっているという、あのきわめて内的な複雑さが、実現されている」(WJ2:759, 宇宙:216)。

さて、この思想をもって、ジェームズは最後に彼のプラグマティックな「神」概念からもう一歩踏み出したのだろうか。あるいはそうかもしれない。死が迫った『多元論的宇宙』で、彼は『諸相』より積極的に神秘的合一の可能性を語り、心靈研究上のものも含めて、それを裏付ける証拠が豊富にあると明言する。「丁度我々が我々自身の意識の周辺と意識を共有しているように、我々自身は、事物の中心にある、より真実な自我の周辺をかたちづくっているのではないだろうか。そうしてこの中心が、我々全体と意識を共有しているのではないだろうか。諸君と我々は、より高い意識において合流し、我々はそのことを知らないにしても、そこで一緒になって働いているのではないだろうか」(WJ2:762, 宇宙:220-1)。「超人的な生命と我々は、意識を共有しているかもしれない……我々は、宇宙においては、我々の書齋にいる犬や猫のようなものかもしれない。この犬や猫は、本を見たり、我々の会話をきいたりするが、その意味を全然知らないのである」(WJ2:771, 宇宙:235)。

だがジェームズが最後に舞い戻るのはいよいよプラグマティズムである。あるいはむしろ彼のプラグマティズムは、実は神秘論と一体なのだと言うべきかもしれない。我々がより大きな自我に取り囲まれているように、「哲学者は、彼が説明している宇宙の中に、彼自身とりこまれている」(WJ2:774, 宇宙:240)。



大きな自我が我々の認識を通じて「表現」されるように、「哲学は、宇宙の本質的な部分であって、宇宙が自分自身のことをどう考えているかをあらわす」(ibid)。我々の理想、信念と行為がより大きな自我の運命を左右するように、「哲学は、実に、宇宙の宇宙自身に対するもっとも重要な反応の一つである。我々哲学者がいて、その理論を展開しているということの結果、宇宙は今までとはちがったようにふるまうかもしれない」(ibid)。哲学は宇宙を「表現」し、「創造」する。あるいは哲学は宇宙の「自己表現」であり「自己理解」である。自分に対する態度が自分の運命を決めるように、宇宙の「自己理解」は、宇宙の運命を決めるのである。

## 終わりに

以上、ジェームズの「神」概念の起源と展開を確認してきた。ジェームズの結論は、「全体との合一」は信じるに値する思想であり、「経験(生)の流れ」の中で実現されているかもしれない思想であり、一つの宇宙を「創る」思想であるということであった。だがさらに、そのような「宇宙」は一つではないということも付け加えるべきであろう。ヴァールが指摘するように「他人が作った宇宙観に彼ほど大きな生き生きとした共感を示した人はいなかった」(ヴァール:148)。その理由は、彼にとっては哲学とは宗教にほかならなかったからであろう。ハーバードで繰り広げられる同僚たちの活発な論争に自分も参加しているということがジェームズには誇らしく思われる。「ハーバードではこれだけ多様な宗教、つまり生に向き合う多様な仕方、つまりそのために戦うべき多様な価値が語られます。ここはまさしく、哲学の宇宙であるというべきでしょう」(同僚パーマー宛1900年, LWJ2:122)。同僚たちがそれぞれの生き生きとした「宇宙」を創り上げるのを見て、ジェームズは思想と行為と宇宙の連関に関する自身の確信をより一層深めただろう。「このようにして」とジェームズは『多元論的宇宙』を締めくくる。「哲学と実在、理論と行動とは、いつまでも同じ円環の中で働いているのである」(WJ2:780, 宇宙:250)。

## 略号

- ヴァール:ヴァール、水野浩二(訳)、2010、『具体的なものへ』、月曜社。(原著1932年)  
Wahl:Wahl, Fred Rothwell (tr.), 1925, *The Pluralist Philosophies of England & America*, The Open Court Company.  
WJ1:James, 1992, *William James: Writings, 1878-1899*, The Library of America.  
WJ2:James, 1987, *William James: Writings, 1902-1920*, The Library of America.  
L1 or L2:James, Henry James Jr (ed.), 2008, *The Letters of William James (two vols. combined)*, Cosimo Classics  
諸相1:ジェームズ、榊田啓三郎(訳)、1969、『宗教的経験の諸相(上)』、岩波文庫。  
諸相2:ジェームズ、榊田啓三郎(訳)、1970、『宗教的経験の諸相(下)』、岩波文庫。  
宇宙:ジェームズ、吉田夏彦(訳)、1961、『多元的宇宙』、日本教文社。